

## はじめに

本論文集は、2009年から現在までおこなってきた日本語の文章・談話単位での表現研究をまとめたものである。

第1章から第6章は、ジャンルとしての日本語の文章・談話表現を捉えるための理論的背景を探った論文を集めている。日本語教育や日本語学は現在、大きな転換期に入ったと考えられる。その背景には日本語学の課題も存在する。現在、日本語教育で使われている日本語に関する文法概念の流れには、大きく国語史的視点の延長でソシユールのラングの側面から研究を進めてきた橋本文法などの国文法由来の文法的品詞分類による分類体系、それに接続する形で欧米の言語研究由来の観点を導入した日本語学で使用されている様々な概念、そして日本語教育の必要性から生まれて来た「複合辞」「基本文型」などの日本語教育での文法的概念があり、こうした異質な立場の混淆現象がもたらしている日本語研究および教育上の説明内容の混乱や困難については、台湾の日本語教育の現場でも周知の事実と言えよう。

本論文集では、第1章、第2章で近年、活発化している文法概念や品詞の見直しに関わる議論の概略を踏まえながら、問題提起として、今までのラング中心の文法概念を、研究史的に具体的テキストに即した表現主体の表現活動のパロール的視点から見直す試みをおこなっている。パロールの問題は、社会的な表現ジャンルでの言語のプラグマティクス（運用）に関する問題であり、以降の章では具体的な言語のプラグマティクスについて、具体的な表現を元に、考察をおこなっている。プラグマティクス（運用）

